

# 「女性だから運転手が務まらないとおもったことはない！」

2023年11月1日 京都自動車新聞3面『視点』に、京阪バス 女性運転士 西島 美由紀さんの記事が掲載されました。

視

点

運転手不足に伴う減便や路線再編などが社会問題化しつつあるバス業界。運転手を確保しようとあの手の手を考えており、女性進出もその一つ。どうしても男性社会のイメージが強い中、どのようにすれば女性運転手が増えるのか……。京阪バス（三浦運出社長、京都市南区）の交野営業所（大阪府交野市）に勤務する西島美由紀さんは「共働きが当たり前の社会になる中、女性が運転手するには設備以上に勤務体系のハードルが高い」と指摘。急速な社会環境の変化を捉え、時代に歩み寄る勤務体系の必要性を強調する。

### 京阪バス◇西島美由紀さん

事務職に就いていた20代から手に職を付けることに、自分の力で人を笑顔にしたいと悩んでいた西島さん。旅行で訪れた関東地方で乗客と会話しているバス運転手と運命的に出会う。そこで「バス運転手は接客業」と気付き、思い切ってバス運転手に転職した。

もともと大きな車が好きだったこともあるが、「女性だから運転手が務まらない」と思ったりはしないと振り返る。最近ではオートマチックの車両も増え、ハンドルも昔比べたら軽く、操作面でのハードルはそこまで高くないそうだ。

1年半ほどバスの運転手を続けた後、地元大阪に戻りトラックのハンドルを4年間握る。トラック運送会社時代は午前2時、3時の始業だが、その分終わるのも早く

### 「時代に歩み寄る勤務体系必要」

子育てははるすかった。それで付けたらいいと、自分の力で人を笑顔にしたいと悩んでいた西島さん。旅行で訪れた関東地方で乗客と会話しているバス運転手と運命的に出会う。そこで「バス運転手は接客業」と気付き、思い切ってバス運転手に転職した。

男性比率の高い職場だが、周囲が気を使ってくれており雰囲気は良いという。「女性だし逆に皆さんに心配を掛けているのではないかと西島さん。乗客からの声は安心して働ける」。

スタートだが、経験者とはいえ「路線を覚えるのに車両感覚を身に付けるのが大変」と笑う。日々の運転の中で気を付けていることは「譲り合いの精神」と「気遣いの精神」。

女性運転手がなかなか増えない点について、「仕事として大きい車両に乗ることへの抵抗や、資格が必要、男性社会に飛び込む不安やフライトがなくなる」という課題を挙げる。中でも「ワークライフバランスが一番ネック」と力を込める。「社内結婚をした場合、夫婦で子育てをしながらバス運転手をこなすのは現実的に難しい。会社と生活が一貫できるような制度や仕組みがあれば安心して働ける」。

併せて、「小型のバスで、しかも短い時間で働ける環境があれば職業として運転手が選ばれる可能性があると思う。また、企業内に24時間保育可能な施設があるとありがたい」と提案する。

趣味はミュージカル。20代の頃からファン。現在の職場は新人でも休みが取りやすいそうで、仕事とプライベートを両立させている。